はしがき

■ **編集の趣旨**

この《10日で確認　新チェックノート》シリーズは、国語の主要分野について、短期間で集中的に知識の整理・確認をすることを目指して編集しました。

したがって、受験直前における知識の最終確認、少し早めの苦手分野の克服などに使用すると効果的です。

本書は、このシリーズの一冊として、「古文常識」に関する最重要事項を系統的にまとめました。

■ **本書の特長**

1　学習日ごとにテーマを設けて、一日分を4ページに収めました。古文常識の習得とその再確認を確実に行うことができるように配慮しました。

2　はじめに、テーマの概説を通して、その内容を身近に理解することができます。

3　次に、基本的な設問を通して、古文常識習得の度合いを測ることができます。

4　さらに、テーマに即した例文を通して、古文常識の幅を広めることができます。

5　特に、第10日では、日本語を正しく理解するために「いろは歌」「五十音図」などを取り上げました。これらを通して、平仮名と片仮名を正確に把握してください。これらは古文常識の基盤であり、またこれらの習得は古文学習の大切な第一歩です。

6　また、「付録」では作品の冒頭表現の意義を説明しました。これは古典を豊かにかつ楽しく読むための掛け替えのない手がかりと言えます。

7　別冊解答書は、「解答」のほかに、詳しい「解説」を試みました。正確を期するために解説の中のところどころに例文を掲載しました。

本書によって、古文常識が確実に身に付くことを期待しています。

編著者

《目　次》

第1日　一日と一年 …… 4
第2日　干支と時刻と方位 …… 8
第3日　平安京と大内裏と内裏 …… 12
第4日　清涼殿と天皇家の人々 …… 16
第5日　寝殿造りと調度類 …… 20
第6日　昔の官職――男性編―― …… 24
第7日　昔の官職――女性編―― …… 28
第8日　服装と化粧 …… 32
第9日　昔の食生活 …… 36
第10日　日本語と「いろは歌」など …… 40
付　録　作品の主題は冒頭表現から …… 44

第1日

一日と一年

昔は、太陽の光による明かりに基づいて生活が営まれていた。したがって、原則としてその明かりのある時刻は昼、ない時刻は夜で、午前二時過ぎまでは夜中であった。そして、夜中が過ぎて夜の明けるまでの間を「暁」、その終わりのころの明け方を「曙」と称し、この「曙」を歌の世界では「東雲」と表現した。「曙」の終わりのころからは「あさぼらけ」と称し、いよいよ明るくなって日の出を迎えることになる。

さて、太陽が西の山に沈み始めだんだんと暗くなっていく、このころを「夕」と称した。日没からの二、三時間を「宵」と称し、あたり一面夜の帳（とばり）に包まれるころを「夜半」と称した。

また昔は、月の満ち欠けに基づいて暦が作られた（太陰暦）。満ち欠けの姿を弓に見立てて、月初め（新月）から満月以前の月を上弦の月、十六夜の月から月の終わりごろまでの月を下弦の月と称した。満ち欠けの一巡は二十九・五三日かかるので、太陰暦の一年は現行の太陽暦の一年よりも十一日少ないことになる。新月を月の初めの第一日（月立・ついたち）とするために、一年十三か月の閏（うるう）年が十九年に七回のわりで設けられた。例えば、四月が二回ある場合、前の四月を「卯月」、後の四月を「閏月」「閏卯月」または「のちの卯月」と称した。

太陰暦は一年の日数がまちまちであるので、季節とのずれが生じ、このずれをうめるために「二十四節気」が導入された。一年を二十四等分して、一月一日を「立春」としたが、無理な配分になることもあった。現行の暦では、二月に「立春」、五月に「立夏」、八月に「立秋」、十一月に「立冬」が配置されている。しかし、日本の気候に適さない感じがしないでもないのは、この「二十四節気」が中国から伝来した考えだからであろう。

問一　次の各語について、古語としての読みを現代仮名遣いで示しなさい。

□①　暁　　□②　曙　　□③　東雲　　□④　黄昏　　□⑤　宵　　□⑥　夜半

①（　　）　②（　　）　③（　　）
④（　　）　⑤（　　）　⑥（　　）

問二　次の各月の読み方を現代仮名遣いで示しなさい。

□①　睦月　　□②　如月　　□③　弥生　　□④　卯月　　□⑤　皐月
□⑥　水無月　　□⑦　文月　　□⑧　葉月　　□⑨　長月　　□⑩　神無月
□⑪　霜月　　□⑫　師走

①（　　）　②（　　）　③（　　）
④（　　）　⑤（　　）　⑥（　　）
⑦（　　）　⑧（　　）　⑨（　　）
⑩（　　）　⑪（　　）　⑫（　　）

①から③までは午前を、④から⑥までは午後を表す。

⑥「夜半」を「やはん」と読むのは現代語としての読み。

太陰暦に従うと
①・②・③は、一月・二月・三月で春。
④・⑤・⑥は、四月・五月・六月で夏。
⑦・⑧・⑨は、七月・八月・九月で秋。
⑩・⑪・⑫は、十月・十一月・十二月で冬。

問三　次の月の名称について、その読みを現代仮名遣いで示しなさい。

□①　新月　□②　三日月　□③　望月　□④　十六夜の月
□⑤　立ち待ちの月　□⑥　居待ちの月　□⑦　臥し待ちの月

①（　　）　②（　　）　③（　　）
④（　　）　⑤（　　）　⑥（　　）
⑦（　　）

問四　次の二十四節気は、今の暦（太陽暦）に合わせると、何月何日ごろでしょうか。後群から選んで符号で答えなさい。

□①　立春（りっしゅん）　□②　春分（しゅんぶん）　□③　夏至（げし）
□④　立秋（りっしゅう）　□⑤　秋分（しゅうぶん）　□⑥　冬至（とうじ）

ア　九月二十三日ごろ　イ　二月四日ごろ　ウ　六月二十一日ごろ
エ　三月二十一日ごろ　オ　十二月二十二日ごろ　カ　八月八日ごろ

①（　）　②（　）　③（　）　④（　）　⑤（　）　⑥（　）

太陰暦で示すと、①は一日ごろ、②は三日ごろ、③は十五日ごろ、④は十六日ごろ、⑤は十七日ごろ、⑥は十八日ごろ、⑦は十九日ごろの月を称したもの。

太陰暦に従うと
①・②は春。③は夏。④・⑤は秋。⑥は冬。

白くなりゆく　日の出前三、四十分ごろから空は一面に白みはじめる。

山ぎは　山と空との境の部分で空の方を主として指す語。

紫だちたる　紫がかった。この紫は古代紫で赤みの強い紫。

ふる年　旧年。十二月中。

一年　今年の初めから今日に至るまでの日々。

○曙

春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。（枕草子・第一段）

※『枕草子』の有名な書き出し。春という季節の美しさを表すにあたって、「春宵（しゅんしょう）・春の宵」とか「春夜（しゅんや）・春の夜」とかといった定番の表現を超越して、「曙」とあざやかに言い切った作者の着眼点が当時の人々を驚かしたのである。作者の新鮮な創造力に驚嘆する。

春は夜明けに限る。だんだんと白みつつある山際の空が、少し明るくなって、赤紫色の雲が細くたなびいているのがいい。

○昔の暦と立春

ふる年に春立ちける日よめる　在原元方（ありはらのもとかた）

年のうちに春は来にけり一年（ひとせ）を
去年（こぞ）とやいはむ今年（ことし）とやいはむ

（古今和歌集巻一・春歌上・一）

旧年のうちに立春になった日よんだ歌

年内だというのにもう春が訪れた。春が来た以上、過ぎ去ったこの一年を去年と呼んだものだろうか。それとも、正月が来るまでは今年と呼ぶべきだろうか。

※『古今和歌集』巻頭の歌。昔の暦（太陰暦・旧暦）では原則として一月一日が「立春」であるが、閏年（うるうどし）などには十二月中に立春がやって来ることがあった。暦の上の季節と太陽の運行上の季節とのずれを詠んだ歌。新しい年を待つあこがれの心とゆく年を惜しむ心との微妙な交錯を表した歌。二句切れ。「やいはむ」の繰り返しの表現に、作者の知的な好奇心が感じられる。